

〈表4〉ギリシア語の数字アルファベット

α'	1	ι'	10	ρ'	100
β'	2	κ'	20	σ'	200
γ'	3	λ'	30	τ'	300
δ'	4	μ'	40	υ'	400
ε'	5	ν'	50	φ'	500
ς', στ'	6	ξ'	60	χ'	600
ζ'	7	ο'	70	ψ'	700
η'	8	π'	80	ω'	800
θ'	9	ϑ'	90	Ϡ'	900

行なわれた。その1つは、前7世紀頃から行なわれていた頭音方式で、ギリシア語数詞の最初の音でその数を表わす。たとえば、πέντε「5」の頭音のΠで5を、δέκα「10」の頭音Δで10を表わす。ただし、数詞の1は、縦線の|で表わされた。しかし、この方式はあまり普及しなかったようである。もっと一般的に行なわれたのは、表4に示したように、アルファベットのひとつの文字に順番に数字を割り当てる方式である。そして、数字であることを示すために、百位までの数字は文字の右肩に、千位以上は文字の左下に鋭アクセント記号（´）を付した。この方式が記録に現われるのは前2世紀頃からであるが、アルファベット文字の使い方から見て、その起源はかなり古いと思われる。

表4の中で、6を示すςはもとのこの位置にあったFの古い字形に由来し、それと並んで用いられたστはστίγμα「印」の合字である。また90を表わすϑはのちのFとともにのちの標準アルファベットから姿を消した。最後の900を表わす文字は、sampiと呼ばれる古い歯擦音文字に由来する。表4には示していないが、1000以上の数字は、α (= 1000) β (= 2000) γ (= 3000) δ (= 4000) ε (= 5000) ς (= 6000) ζ (= 7000) η (= 8000) θ (= 9000) ι (= 10000) κ (= 20000) というようになる。この数字表記の実例を示すと、たとえば εψμβ´ = 5742, αϠπη´ = 1988 などである。

このアルファベット数字は現代のギリシアでもまだ生き残っていて、ちょうど日本語の漢数字と同じように、アラビア数字と併用され、やや古風で形式ばった文脈や、書物の巻数、ページ数などで用いられている。

【参考文献】

- Heubeck, A. (1979), *Schrift* (Archaeologia Homerica 3-10, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen)
- Jeffery, L. H. (1961), *The Local Scripts of Archaic Greece: A study of the origin of the Greek Alphabet and its development from the 8th to the 5th century B. C.* (rev. ed. 1990 by A. W. Johnstone, Clarendon, Oxford)

(1982), "Greek alphabetic writing", *The Cambridge Ancient History* 3 (1): 819-833 (Cambridge University Press)

Kirchhoff, A. (1887, 1970⁴), *Studien zur Geschichte des griechischen Alphabets* (Bertelsmann, Gütersloh; Nachdruck: Gieben, Amsterdam)

Phol, G. (ed.) (1968), *Das Alphabet: Entstehung und Entwicklung der griechischen Schrift* (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt)

Schubart, W. (1966), *Griechische Palaeographie* (Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München)

Σίγαλας, Α. (1974), *Ίστορία τής Έλληνικής γραφής* (『ギリシア文字の歴史』) (Κέντρον Βυζαντινών Έρευνών, Θεσσαλονίκη)

Turner, E. G. (1970), *Greek Manuscripts of the Ancient World* (Clarendon, Oxford)

松本克己 (1981), 「ギリシア・ラテン・アルファベットの発展」『世界の文字』(講座言語 5, 大修館書店, 東京), pp. 73-106.

ジョン・ヒーリ著/竹内茂夫訳 (1996), 「初期アルファベット」(大英博物館双書「失われた文字を読む」4, 学芸書林, 東京)

ブライアン・クック著/細井敦子訳 (1996), 「ギリシア語の銘文」(大英博物館双書「失われた文字を読む」5, 学芸書林, 東京)

【参照】 フェニキア文字, ヘブライ文字, 北西セム文字

(松本 克己)

キリスト教ポー・カレン文字 : 英 Pwo Karen mission script

【起源・概況】 カレン系言語の中で独自の文字を有するのは、スゴー・カレン語、ポー・カレン語(ブオー・カレン語)、バオ語(バオウ語)の3言語である。これらの言語の文字を総称して、カレン文字▼という。このうち、ポー・カレン語の文字にはキリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字▼、レーケー文字(Leke script)がある(仏教ポー・カレン文字とレーケー文字については、「仏教ポー・カレン文字」の項参照)。

キリスト教ポー・カレン文字のおおもとになったのは、アメリカのパプティスト派宣教師で、スゴー・カレン文字▼ (=キリスト教スゴー・カレン文字)を作ったことで有名なウェイド(J. Wade)が1830年代に考案した文字体系であった。ウェイドの手になるポー・カレン文字は、彼自身が考案したスゴー・カレン文字におおむね倣ってはいるものの、あまり出来ばえのよいものではなかった。これに、同じアメリカのパプティスト派宣教師ブレイトン(D. L. Brayton)が1850年代に改良を加えたものが、現在も使われているキリスト

教ポー・カレン文字である。字母の形は、変更が加えられている〈gh〉と〈s〉を除いて、ビルマ文字[▼]と同一である。

ポー・カレン語は、ビルマ(ミャンマー)のカレン州周辺およびタイ側で話される東部方言と、ビルマ南部のイラワジ(エヤワディ)・デルタ周辺で話される西部方言の2つに大きく分かれる。東部方言と西部方言は相互に理解がほとんど不可能なほど、発音・語彙などの点で異なっている。キリスト教ポー・カレン文字は、元来、東部方言の発音に基づいて作られた文字であったが、東部地域のポー・カレン人にはもともと仏教文化が深く浸透しており、キリスト教の布教を目的として作られたこの文字が広く使われるには至らなかった。

ところが、ビルマのイギリス植民地時代、カレン人の民族意識の高揚とともにキリスト教入信者の増えたイラワジ川のデルタ地帯において、この文字が広く使われるようになっていった。1913年にラングーンで出版されたデュフィン(C. H. Duffin)の *A Manual of the Pwo-Karen Dialect* は、イラワジ・デルタの方言、すなわち西部方言をキリスト教ポー・カレン文字で表記した入門書であることから、20世紀初頭には西部方言がすでにこの文字によって書かれていたことが分かる。

現在では、キリスト教ポー・カレン文字はもっぱらデルタ地帯で使われており、当地では西部方言の発音で読まれる。このため、ビルマでは、キリスト教ポー・カレン文字を「西のポー・カレンの文字」と呼び、もっぱら東部地域で使われる仏教ポー・カレン文字を「東のポー・カレンの文字」と呼んで対比することが多いほどである。ただし、東部地域にもわずかながらポー・カレン人のキリスト教徒は存在するのであって、彼らの間ではこの文字が使われており、読むときには東部方言の発音で読まれる。

【発音との関係】 元来は東部方言を書き表わすために作られた文字であるだけに、キリスト教ポー・カレン文字で西部方言の発音を書き表わすには少なからず無理がある。1つの声調に複数の声調符号が対応する、あるいは、単母音と二重母音の区別が書き分けられないなど、様々な問題点がある。しかし、それでもこの文字が西部方言の文字として使用可能なのは、東部方言と西部方言の音韻対応がかなり規則的だからである。

キリスト教ポー・カレン文字には、西部方言だけでなく東部方言の音韻体系とも合致しない部分がある。このずれの多くは、文字の不出来によるものではなく、文字が成立した1800年代以降に生じた音変化が原因である。

以下の説明では、西部方言と東部方言の双方で同じ綴りをどのように読むかを示す。西部方言の音形とし

〈表1〉子音字母

က	kh	ဂ	gh	င
စ	ch	ဃ	ny	hr
တ	th	ဒ	န	ပ
ဖ	ဖ	မ	ယ	ရ
လ	ဝ	ဆ	ဟ	ခ
	ၤ	ၥ		

てはバセイン近郊の町チョウンビョーで話されるチョウンビョー方言、東部方言の音形としてはカレン州の州都バアンで話されるバアン方言のものを掲げる。音韻表記はKato (1995)に従っている。

1) 子音字母 子音字母は、次に示す27種類がある(表1参照)。

このうち、〈j〉〈ny〉〈h〉などは、どちらの方言でもビルマ語などからの借用語にのみ用いられる。なお、〈ny〉は、1950年代に新しく加えられたものである。

これら27文字の西部方言での音価は、以下の通りである。

- 〈k〉 /k-/、〈kh〉 /kh-/、〈g〉 /ɣ-/、〈gh〉 /x-/、
- 〈ng〉 /ŋ-/、〈c〉 /s-/、〈ch〉 /sh-/、〈j〉 /z-/、
- 〈ny〉 /ɲ-/、〈hr〉 /ɣ-/、〈t〉 /t-/、〈th〉 /th-/、
- 〈d〉 /d-/、〈n〉 /n-/、〈p〉 /p-/、〈ph〉 /ph-/、
- 〈b〉 /b-/、〈m〉 /m-/、〈y〉 /j-/、〈r〉 /r-/、〈l〉 /l-/、
- 〈w〉 /w-/、〈s〉 /θ-/、〈h〉 /h-/、〈q〉 /ʔ-/、
- 〈H〉 /ɣ-/、〈hp〉 /p-/

一方、東部方言での音価は、次の通りである。

- 〈k〉 /k-/、〈kh〉 /kh-/、〈g〉 /ɣ-/、〈gh〉 /x-/、
- 〈ng〉 /ŋ-/、〈c〉 /c-/、〈ch〉 /ch-/、〈j〉 /c-/、
- 〈ny〉 /ɲ-/、〈hr〉 /ɣ-/、〈t〉 /t-/、〈th〉 /th-/、
- 〈d〉 /d-/、〈n〉 /n-/、〈p〉 /p-/、〈ph〉 /ph-/、
- 〈b〉 /b-/、〈m〉 /m-/、〈y〉 /j-/、〈r〉 /r-/、〈l〉 /l-/、
- 〈w〉 /w-/、〈s〉 /θ-/、〈h〉 /h-/、〈q〉 /ʔ-/、
- 〈H〉 /ɣ-/、〈hp〉 /h-/


以下に、注意すべき点をいくつかあげておく。

- a) 字母は単独だと軽声音節(/ə/)を表わす。たとえば、〈k chaN3〉「象」は /kəshàn/ (西部方言)、/kəchân/ (東部方言) と読まれる。
- b) 西部方言では 〈g〉と〈H〉は同じ音素を表わすが、東部方言では別の音素を表わす。
- c) 西部方言には、有声両唇閉鎖音の系列に、声門化音

(入破音) /b-/ と、非声門化音 /b-/ の対立がある。⟨b⟩ は /b-/ を表わし、/b-/ を書き表わす文字はないため、これには ⟨p⟩ や ⟨ph⟩ があてられる。非声門化音をもつ語彙の数は少なく、実用上はさほど問題がない。たとえば、3人称複数の代名詞 /bá/ は、東部方言の書き方に従って ⟨pA1⟩ と書かれる。

d) ⟨hp⟩ は、西部方言では /p-/、東部方言では /h-/ と読まれる。この文字は「人間」を表わす形態素、/pã-/ (西部方言) および /hã-/ (東部方言) にのみ使われる。この形態素のみに特別の字体をあてた理由は明らかではないが、考えられる理由の1つとして、スゴー・カレン語の /pyã/ 「人」がスゴー・カレン文字 (キリスト教スゴー・カレン文字) で ⟨hpa1⟩ と書かれることに共通性をもたせようとした可能性が考えられる。


2) 介子音符号 介子音符号には ⟨j⟩ ⟨l⟩ ⟨r⟩ ⟨w⟩ の4種類がある。字母 ⟨k⟩ についての例を次に示す。



 ⟨kj⟩ ⟨kl⟩ ⟨kr⟩ ⟨kw⟩

西部方言・東部方言ともに、⟨j⟩ は /-j-/ を、⟨l⟩ は /-l-/ を、⟨r⟩ は /-r-/ を、⟨w⟩ は /-w-/ を、それぞれ表わす。この ⟨j⟩ ⟨l⟩ と同じ字体が、モン文字[▼]ではそれぞれ /-l-/ と /-j-/ を表わし、逆になっているので、注意しなければならない。

東部方言・西部方言ともに、⟨kj⟩ は /c-/ を表わす。東部方言では、/c/ : /s/ の対立がないので、この書き分けは音韻論的に見れば必要ないが、ビルマ語からの借用語などを表わすために ⟨kj⟩ が使われる。


3) 母音符号・鼻音符号・声調符号 母音符号には、次の10個がある (字母 ⟨k⟩ についての例を示す)。


 ⟨a⟩ ⟨i⟩ ⟨e⟩ ⟨E⟩ ⟨A⟩


 ⟨j⟩ ⟨u⟩ ⟨W⟩ ⟨o⟩ ⟨O⟩

このうち、⟨A⟩ と ⟨J⟩ を除いた残りの8個は、ビルマ文字にもまったく同じ形態のものが存在する。⟨a⟩ は mau'cha. に、⟨i⟩ は txe:dxet:in. に、⟨e⟩ は 'au'myi' に、⟨E⟩ は nau'pyi' に、⟨u⟩ は tachaun:ngin. に、⟨W⟩ は hnachaun:ngin. に、⟨o⟩ は loun:ji:tin. に、⟨O⟩ は loun:ji:tin. shan_kha' にそれぞれ同じである。母音符号のうち、⟨a⟩ ⟨i⟩ ⟨E⟩ ⟨A⟩ ⟨u⟩ ⟨o⟩ ⟨O⟩ の7個には鼻音符号 ⟨N⟩ がつきうる。ただし、母音符号が単独で表わす音価と、鼻音符号がついたときの音価は、音韻論的に必ずしも関連があるわけではない。

声調符号には、⟨1⟩ ⟨2⟩ ⟨3⟩ ⟨4⟩ ⟨5⟩ の5個がある。字母 ⟨l⟩ についての例を次に示す。


 ⟨1⟩ ⟨2⟩ ⟨3⟩ ⟨4⟩ ⟨5⟩

以下では、声調符号がつかない場合を ⟨0⟩ と表記してある。

表2に、母音符号・鼻音符号・声調符号の可能な組み合わせすべてをあげ、これらが原則的に西部方言と東部方言でどのように読まれるかを示す (字母 ⟨m⟩ についての場合)。

以下に、注意すべき点をあげる。

a) 母音符号 ⟨a⟩ は声調符号がつくと、実際には省略して書かれる。すなわち、⟨a1⟩ ⟨a2⟩ ⟨a3⟩ ⟨a4⟩ ⟨a5⟩ では母音符号 ⟨a⟩ は省略される。

b) 音韻論的に見ると、声調符号 ⟨4⟩ と ⟨5⟩ は、少なくともこの文字が成立した時点においては、純粋な声調符号というよりも、むしろ声調と音節末の声門閉鎖音を同時に表わす符号であった。現在では、パアン方言など多くの方言で音節末の声門閉鎖音は消滅しており、このような方言では ⟨4⟩ と ⟨5⟩ は純粋な声調符号であるかのように見える。

c) 声調符号 ⟨4⟩ と ⟨5⟩ は、母音符号 ⟨E⟩ ⟨A⟩ ⟨O⟩ の3つとは原則的に共起しない。また、鼻音符号とも共起しない。これは音韻論上の共起制限を反映したものである。音韻体系から見れば、⟨4⟩ と ⟨5⟩ は母音符号 ⟨i⟩ ⟨u⟩ ⟨W⟩ と共起しないはずだが、この音韻論上の空き間を利用して、⟨i⟩ ⟨u⟩ ⟨W⟩ と ⟨4⟩ ⟨5⟩ の組み合わせは、二重母音を表わすために使われている。

d) ⟨A1⟩ ⟨A2⟩ ⟨A3⟩ ⟨J0⟩ ⟨J3⟩ ⟨J4⟩ は、これらが表わす音形をもつ単語が少ないため、実際に現われることは稀である。

【使用状況】 キリスト教ポー・カレン文字がどれくらいの人々によって使われているのかは、正確には分からない。しかし、デルタ地帯に住むポー・カレン人の人口は50万人を下らないとされ、このうち4分の1から3分の1がキリスト教徒だと考えられていること、そして、当地のポー・カレン教会が休日などを利用してかなり精力的にこの文字の普及運動を行なっていることなどから、西部方言の話し手でこの文字の読み書きができる人の数は決して少なくないと考えられる。とはいえ、多数派である仏教徒の間には、キリスト教に対する反発もあって、この文字はほとんど普及していないようである。一方、東部方言地域は仏教徒が大部分を占めるため、この文字はごく少数のキリスト教徒の間でしか用いられていない。

ところで、ポー・カレンの聖書は東部方言を用いて書かれているのだが、この聖書がそのままデルタ地帯

〈表2〉母音符号・鼻音符号・声調符号の組み合わせ

		西部方言	東部方言
ᵂ	〈a0〉	/-â/	/-ā/
ᵂ₂	〈a1〉	/-á/	/-à/
ᵂᵂ	〈a2〉	/-à/	/-á/
ᵂᵂ	〈a3〉	/-à/	/-ā/
ᵂᵂ	〈a4〉	/-â?/	/-á/
ᵂᵂ	〈a5〉	/-â?/	/-à/
ᵂ̇	〈i0〉	/-î/	/-ī/
ᵂ̇₂	〈i1〉	/-í/	/-ì/
ᵂ̇ᵂ	〈i2〉	/-ì/	/-í/
ᵂ̇ᵂ	〈i3〉	/-î/	/-i/
ᵂ̇ᵂ	〈i4〉	/-êi?/	/-ái/
ᵂ̇ᵂ	〈i5〉	/-êi?/	/-ài/
ᵂ̣	〈e0〉	/-ê/	/-ē/
ᵂ̣₂	〈e1〉	/-é/	/-è/
ᵂ̣ᵂ	〈e2〉	/-è/	/-é/
ᵂ̣ᵂ	〈e3〉	/-è/	/-ē/
ᵂ̣ᵂ	〈e4〉	/-ê?/	/-é/
ᵂ̣ᵂ	〈e5〉	/-ê?/	/-è/
ᵂ̣̇	〈E0〉	/-ê/ または /-ái/	/-ē/
ᵂ̣̇₂	〈E1〉	/-é/ または /-ái/	/-è/
ᵂ̣̇ᵂ	〈E2〉	/-è/ または /-ài/	/-é/
ᵂ̣̇ᵂ	〈E3〉	/-è/ または /-ài/	/-ē/
ᵂ̣̣	〈A0〉	/-â/	/-ā/
ᵂ̣̣₂	〈A1〉	/-á/	/-à/
ᵂ̣̣ᵂ	〈A2〉	/-à/	/-á/
ᵂ̣̣ᵂ	〈A3〉	/-à/	/-ā/
ᵂ̣̣̇	〈J0〉	/-î/	/-ī/
ᵂ̣̣̇₂	〈J1〉	/-í/	/-ì/
ᵂ̣̣̇ᵂ	〈J2〉	/-ì/	/-í/
ᵂ̣̣̇ᵂ	〈J3〉	/-î/	/-i/
ᵂ̣̣̇ᵂ	〈J4〉	/-êi?/	/-ái/
ᵂ̣̣̇ᵂ	〈J5〉	/-êi?/	/-ài/
ᵂ̣̣̣	〈u0〉	/-û/	/-ū/
ᵂ̣̣̣₂	〈u1〉	/-ú/	/-ù/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈u2〉	/-ù/	/-ú/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈u3〉	/-ù/	/-û/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈u4〉	/-ôu?/	/-áu/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈u5〉	/-ôu?/	/-àu/

ᵂ̣̣̣	〈W0〉	/-û/	/-ū/
ᵂ̣̣̣₂	〈W1〉	/-ú/	/-ù/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈W2〉	/-ù/	/-ú/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈W3〉	/-ù/	/-û/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈W4〉	/-ôu?/	/-áu/
ᵂ̣̣̣ᵂ	〈W5〉	/-ôu?/	/-àu/
ᵂ̣̣̣̣	〈o0〉	/-ô/	/-ō/
ᵂ̣̣̣̣₂	〈o1〉	/-ó/	/-ò/
ᵂ̣̣̣̣ᵂ	〈o2〉	/-ò/	/-ó/
ᵂ̣̣̣̣ᵂ	〈o3〉	/-ò/	/-ô/
ᵂ̣̣̣̣ᵂ	〈o4〉	/-ô?/	/-ó/
ᵂ̣̣̣̣ᵂ	〈o5〉	/-ô?/	/-ò/
ᵂ̣̣̣̣̣	〈O0〉	/-ô/ または /-áu/	/-ō/
ᵂ̣̣̣̣̣₂	〈O1〉	/-ó/ または /-áu/	/-ò/
ᵂ̣̣̣̣̣ᵂ	〈O2〉	/-ò/ または /-àu/	/-ó/
ᵂ̣̣̣̣̣ᵂ	〈O3〉	/-ò/ または /-àu/	/-ô/
ᵂ̣̣̣̣̣̣	〈aN0〉	/-ân/	/-ān/
ᵂ̣̣̣̣̣̣₂	〈aN1〉	/-án/	/-àn/
ᵂ̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈aN2〉	/-àn/	/-án/
ᵂ̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈aN3〉	/-àn/	/-ān/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣	〈iN0〉	/-êin/	/-ēin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣₂	〈iN1〉	/-éin/	/-èin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈iN2〉	/-èin/	/-éin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈iN3〉	/-èin/	/-ēin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣	〈EN0〉	/-âin/	/-āin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣₂	〈EN1〉	/-áin/	/-àin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈EN2〉	/-àin/	/-áin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈EN3〉	/-àin/	/-âin/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣	〈AN0〉	/-ân/	/-ān/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣₂	〈AN1〉	/-án/	/-àn/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈AN2〉	/-àn/	/-án/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈AN3〉	/-àn/	/-ān/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣̣	〈uN0〉	/-ûn/	/-ūn/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣̣₂	〈uN1〉	/-ún/	/-ùn/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈uN2〉	/-ùn/	/-ún/
ᵂ̣̣̣̣̣̣̣̣̣̣ᵂ	〈uN3〉	/-ùn/	/-ûn/

၆:	<oN0>	/-òun/	/-õun/
၆?	<oN1>	/-óun/	/-òun/
၆!	<oN2>	/-òun/	/-óun/
၆?	<oN3>	/-òun/	/-òun/

၆:	<ON0>	/-àun/	/-õn/
၆?	<ON1>	/-áun/	/-òn/
၆!	<ON2>	/-àun/	/-ón/
၆?	<ON3>	/-àun/	/-ôn/

で使われている。そのため、聖書の中に見られる単語や表現のかなり多くは、デルタ地帯のキリスト教徒たちにとってはなじみのないものである。面白いことに、彼らは聖書の中の東部方言形を、東部方言の形式としてではなく、由緒正しい文語体に属するものだと考えていることが多いようである。

【文例】 ポー・カレン語の聖書から、創世記の冒頭2文を掲げる。それぞれが、西部方言と東部方言でどのように読まれるかを示す（〈図〉の部分）。

<IA0 qAkhaN2thi5 nO2 ywal ma1 kE2 thaN2 mW5kho2 dE1 gaN2kho2 IO3.>

/lá ?əkhànthèi? nò jwá má kài thàn mōu?khò dé yànkho lò/ (西部方言)

/lā ?əkhánthài nó jwà mà ké thàn màukhú dè yáukhú ló/ (東部方言)

「はじめに、神が天と地を創造した」

<ta5 gaN2kho2 nO2 qO2 we3 leltel dE1 plO1plO1 IO3.>

/tá? yànkho nò ?àu wè lété dé pláupláu lò/ (西部方言)

/tà yáukhú nó ?ó wè lìtì dè plòplò ló/ (東部方言)

「そして地は、形がなく、何もなかった」

先に示した読み方と異なるものがあるので、下にあげておく。

西部方言では、〈IA0〉「…において」は /lá/ ではなく /lò/ と読まれる。また、〈dE0〉「そして」は /dē/ ではなく /dé/ と読まれる。ちなみに、この〈dE0〉は、元来、西部方言には存在しない形式である。

東部方言では、〈e〉は〈w〉の後ろだと /i/ ではなく /e/ と読まれる。そのため〈we3〉は /wi/ ではなく /wē/ と読まれる。また、〈dE0〉は /dè/ と読まれるのが普通である。

【参考文献】

Kato, Atsuhiko (加藤昌彦) (1995), "The phonological systems of three Pwo Karen dialects", *Linguistics*

〈図〉 創世記の冒頭

၆:၆?၆!၆? ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆
ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆ဝ၆

of the Tibeto-Burman Area 18 (1) : 63-103.

Mranmaa Chuihralac Lam:cany' Paatii (1967), *Tuing:rang:saa: Yany'kye:hmu Rui:raa Dhale. Thum':cam' myaa: — Karang* (ビルマ社会主義計画党編『ビルマ原住民族の文化と伝統習慣——カレン人』) (Rangoon)

Purser, M. A. & Saya Tun Aung (1922), *A Comparative Dictionary of the Pwo-Karen Dialect* (American Baptist Mission Press, Rangoon)

Stern, Theodore (1968), "Three Pwo Karen scripts: a study of alphabet formation", *Anthropological Linguistics* 10 (1) : 1-39.

【参照】 スゴー・カレン文字, 仏教ポー・カレン文字, ビルマ文字

(加藤 昌彦)

キリル文字 英 Cyrillic alphabet, 仏 alphabet cyrillique, 独 Kyrilliza, kyrillische Schrift, 露 кириллица

キリル文字は古代教会スラヴ語の現存写本(10~11世紀)にグラゴル文字[▼]とともに用いられているほか、中世から18~19世紀まで、ブルガリア、セルビア、ロシアの正教徒スラヴ人の教会用および日常の書物の唯一の文字体系として広く普及した。近現代では、その体系と字体に一定の改変を加えた諸変種が、多くのスラヴ諸語やその他の言語の文字体系として用いられている(後述参照)。当初は手書きに限られていたが、16世紀初めから金属活字による印刷が始まり、やがて字体も別掲の一覧表のように統一された(表1参照)。一見して、ギリシア文字[▼]のウンキアリス体(uncialis, 大文字書体, アンシャル体とも)と形も音も一致するものが多い。

【成立の事情】 古代教会スラヴ語のテキストは、例外的なラテン文字[▼]による1例(フライジング断片 Freisinger Blätter)を除けば、すべてグラゴル文字か、キリル文字によっている。この両文字の間には、後述のように体系上の密接な関係が存在し、その一方から他方が生じたと考えざるをえないために、有名なキリロス・メソディオス(Kyrillos-Methodios)兄弟〔キュリロス・メトディオスとも〕のスラヴ人に対するキリスト教伝道活動との関連で、そのどちらを彼らの発明と考えるべきかについて古来多くの主張がなされてきた。

現在では大多数の学者が、グラゴル文字の方がより古く、いろいろな点で体系的な一貫性をもつと考え、